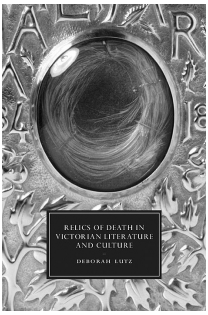
書　評

Deborah Lutz, *Relics of Death in Victorian Literature and Culture*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2015)



福原　俊平

デスマスク、遺髪が編み込まれたアクセサリー、さらには人間の皮膚を表紙とした人皮装丁本。子供たちの歯をペンダントに加工し、夫の死後は故人の寝間着を抱いて毎晩眠ったヴィクトリア女王。現代の感覚からすればかなり奇妙であり、悪趣味とも感じられるかもしれないが、19世紀の英国においては、親しい人の死後、頭髪や歯などの遺体の一部や生前愛用していた日用品を形見として保持したり、身に着けたりすることは奇異なことではなく、むしろ当然のことであった。ウィルキー・コリンズの『隠れん坊』では、“a Hair Bracelet is in England one of the commonest ornaments of woman's wear”とされているそうだ。ヴィクトリア朝文学に形見の小道具が良く出てくることは周知の事実だろうが、本書はそのような遺物、遺品の文化を掘り下げ、ヴィクトリア朝における死のあり方を文学作品と関連付けて論じている。

本書の特徴は、何よりも着眼点の面白さだろう。19世紀英国における遺体、遺品という物質的な死の形に注目し、その物質性崇拝の中に当時の文化的な価値観を見出している。もちろん、このようなアプローチはフィリップ・アリエスに代表される死の文化史の系譜を踏まえたものであるが、19世紀英国の文学者にまつわる事例が豊富に紹介されているところが、ヴィクトリア朝文化を専門とする研究者には興味深いだろう。具体例をいくつか挙げると、ディケンズが死去した際、ジョン・エヴァレット・ミレーとトーマス・ウールナーが翌日にディケンズ宅を訪れ、ミレーはディケンズの遺体をスケッチし、ウールナーは胸像を作成するために型を取ったという逸話や、シャーロット・ブロンテが、エミリーとアンの死後、彼

女たちの頭髪で編まれたアクセサリーを身に着けていたという事実などが述べられており、雑学的な楽しさもある。また、数はさほど多くはないものの、写真資料も適宜用いられており、頭髪で編まれたアクセサリーの実物、シェリーの頭蓋骨の欠片、エミリー・ブロンテがそこで亡くなったとされるソファの写真などが収められている。

もちろん、本書は雑学を集めた娯楽書ではなく研究書である。タイトルにもあるように、文化と文学という二つの側面を論じつつ、その関連性を論じているのだが、その内容をいくつかのキーワードを用いてまとめたい。まず、文化という観点では、死と遺品に対する態度の通史的な変遷が、「世俗化」というキーワードでまとめられている。遺物、遺品の収集の歴史を振り返ると、キリスト教聖人の亡骸や愛用品を人々が競い合って求めた聖遺物の時代にさかのぼる。当初は宗教的なものであったが、収集対象は徐々に世俗化し、ロマン派の時代の英雄崇拝、そして18世紀末以降のリテラリー・ツーリズムの勃興に伴い、文学者の遺物も収集および崇拝の対象となった。そして、ヴィクトリア朝時代を通して、聖人でも著名人でもない世俗の人間さえもが対象となり、愛おしい人々の記憶を保つため、様々な形で亡骸の一部や愛用品が保存されるようになった。

文化論としての本書のアプローチ方法としては、「物質性」をキーワードとして挙げることができる。Elaine Freedgoodの*The Ideas in Things*にたびたび言及していることからも分かるように、ヴィクトリア朝における遺物や遺品というモノに注目し、モノを通して当時の死への態度を把握しようとする。また、物質性と言えば、ヴィクトリア朝は産業革命の影響により大量生産、大量消費という消費社会化した時代でもある。そのような社会の中で、遺物や遺品は機械製造が不可能なものとして特別な価値を獲得した。消費主義へのアンチテーゼとして、複製不能な唯一性を保持する存在でもあったとされる。

以上のような視点から、19世紀英国の死をとりまく文化がまとめられているのだが、そこから見えてくるのは死が美化された時代の死生観である。結核による死など、ロマン派における美化された死のイメージは、スーザン・ソンタグの論以降よく知られているところではあるが、ヴィクトリア朝においても死は肯定的に、時に美化してとられた。Lutzはそこに

福音主義の影響を見出しており、平穏で幸福な死というイメージは福音主義者以外にも共有されていたと論じている。このような死のイメージを体現する一例として挙げられているのは、ディケンズが描いたネルの美しく穏やかな死である。

福音主義的な“afterlife”の概念は、死は終わりではなく、生と死は連続しているという認識をもたらした。ヴィクトリア朝小説においては、そのような連続性の意識が様々な形で表れており、『嵐が丘』におけるヒースクリフとキャサリンの死後の再会というテーマ、ディケンズにおける再生のテーマなどの形で見ることができる。また、この生と死の連続性は、当時のオカルト・ブームとも関連する。ヴィクトリア女王も没頭した降霊術では、生と死の連続性は極めて明瞭である。霊媒師がこの世と死者の世界をつなぐ仲介役となり、時として高度な技として霊の「物質化」を行ったように、物質は生と死の世界をつなぐ通路であった。このように、本書は生と死が連続したものとされた時代において、遺物や遺品が担った意義を論じている。

本書の文学研究としての側面に話を移すと、議論対象としては、詩においてはロマン派からラファエル前派の詩人たち、そしてこのテーマには欠かせないテニスンが含まれ、小説ではディケンズ、ブロンテ、ハーディの作品が中心に論じられている。多様な文学作品を扱っており、それぞれの詩人や小説家の個性も論じられているのだが、この書評では、これらの文学者の共通点とされているものを紹介したい。それは、遺物や遺品が記憶の受け皿や物語の源泉となっており、その意味において、文学作品と同じ役割を果たしているということである。

本書は遺物の物語性に注目し、聖遺物の時代から、遺物と物語は切り離すことができない関係にあると論じている。聖遺物が本物であるということを証明し、その物体に価値を与えたのは、それにまつわる数々の逸話によってである。このような物体に込められた物語性にLutzは注目し、世俗的な遺物であっても、そこに愛情や記憶が注ぎ込まれ、様々なエピソードや物語の源泉となっていると指摘する。ヴィクトリア朝小説においても、遺物や遺品はしばしば物語の原動力であった。例えば、髪の房は頻繁に用いられた物語上の装置であり、ハーディの『遥か狂乱の群れを離れて』、

『森林地の人々』、ウィルキー・コリンズの『ノー・ネーム』などにおいて、プロット展開上で重要な役割を担った。

本書の議論で興味深いのは、文学作品を聖骨箱や墓など、死にまつわる空間と同列のものとして論じている点である。例えば、キーツ論においては、「イザベラ」など死と死体を題材とした詩をいくつか取り上げ、死体が美的なものとして詩の中に納められることにより、詩が聖骨箱としての役割を果たしていると論じている。また、テニスンの『イン・メモリアム』論においては、哀歌をシュラインと、墓を墓碑銘と関連付けて論じ、哀歌は遺体を包み込むようにテキストで構成されたシュラインであるとしている。さらに、人間の身体も一つのテキスト空間だとされる。ディケンズの『二都物語』の冒頭において、人間の身体を秘密が隠された空間ととらえる記述は有名であるが、身体に込められた物語性を体現する究極の形が人皮装丁本である。犯罪者ジョージ・ウォルトンは、処刑後に自身の伝記を自身の皮膚で装丁するように依頼し、それが実現した。その結果、彼の人生と犯罪の物語は、自身の皮膚の中に収められることとなった。つまり、ウォルトンの人皮装丁本は、墓や墓碑銘と同様に、死の証であると同時に死を乗り越えて永遠に語り続けることになったのである。

そのような死の文化が終焉した一因として、Lutzは第一次世界大戦をあげている。第一次世界大戦では多くの戦死者を出したが、戦死者の遺体は大きく損傷し、あるいは遺体自体が発見不能な場合も多かった。ヴィクトリア朝的な死生観においては、死は美しいものであり、遺体の物質性が生と死の境界性を乗り越える通路であったが、大戦による無残な遺体と遺体の不在は、その前提を根本から崩壊させた。そのような死のあり方をLutzは慰霊碑という空間になぞらえている。慰霊碑と墓の決定的な違いは、遺体がそこに納められていない点である。ヴィクトリア朝の死の空間においては、遺体という物質性を拠り所として、記憶や理想化によって喪あるいは文学的な空間が構成されていたのだが、慰霊碑はその中心に空洞を抱えた追悼の場であり、そこにLutzは根本的な変化を見ている。

以上のように本書をまとめてみたが、遺物や遺品という物質に注目している点において、本書はPeter Conradの*The Victorian Treasure-House*やAsa Briggsの*Victorian Things*のような、モノを中心とした文化論の伝統に

つながる研究である。また、聖骨箱や墓という空間と文学作品との類似性を論じているという点では、Conradの論もそうであったように、すぐれた空間論あるいは文学建築論にもなっている。さらに、遺物や遺品を通して、死者にまつわる過去や記憶を論じるという点では、ヴィクトリア朝における「記憶」という近年盛んな研究テーマの一形態だと言えるだろう。そのような研究コンテクストにおける本書の特徴は、ナショナリズムなどの大きなテーマを射程に入れるよりも、あくまでも近しい人々による故人への思いに焦点を当てている点である。例えば、本書ではリテラリー・ツーリズムにも言及されているため、それをナショナリズムや帝国主義などと関連付けて論を広げることもできたかもしれない。しかし、本書は基本的にはパーソナルな記憶を中心として扱っており、政治性の領域にはあまり踏み込まない。それを限界と取るか美点と取るかは、読み手次第であろうが、私は後者であると考える。

――福岡大学准教授